

## 「状況の連体節」の構文

### 接続助詞の形成における「の」の役割

レー・パン・クー

#### 0. はじめに

日本語で、二つの文を結びつける方法の中には、一方に「こと」とか「の」をつけて、他方の文の中の名詞句の位置に取り込む構文法がある。この場合、「こと」「の」は、文を名詞化するために用いられる機能語だと考えられるが、変形文法では、「補文標識」と呼ばれているものである。また、機能語としての性格は、「こと」に比べて「の」の方が強い。換言すれば、「の」が「こと」ほど名詞的な性質を備えていないのである。例えば、文中の或る補語を取りだして、特に他のものと際立たせて叙述する強調構文(変形文法では、「分裂文」と呼ばれる構文)では、「こと」だけが「だ」の前に表れる。井上和子(1976:265)や寺村秀夫(1981:145)を参照。下はその例である。

- (1) 彼は歩く／こと／の／が好きだ。
- (2) 彼が好きなのは歩くこと／\* の／だ。

従来、上のような「の」による名詞化構文に関する研究は、主に、名詞句に付く「が」「を」等が純粹に格関係を表わす格助詞であることを前提とするものである(例えば、上述の井上(1976)、寺村(1981)の他に工藤真由美(1985)等)。ところが、「の」によって名詞化した文の後につく「が」「を」が格という概念では押えきれないような場合もある。次の例を見てみよう。

- (3) ある学者が「これからの遺跡調査の重要な課題は、科学の力の応用だ」と語っているのを、考古学の本で読んだことがある。

( 天声人語、1983-11-14)

- (4) すると、その途中で、髪の長い小肥りの男がパイプをくわえて正面から来るのに出遇った。

( 松本清張『蔭った旋舞』p.170)

- (5) こちらは、歩き方が早すぎるのではないかと反省しているのを、先方は見習って早く歩きたいという

( 天声人語、1984-19-27)

- (6) 一九五六年七月二六日夜、ナセルはアレキサンドリアで演説した。この演説で、彼は「レセップス」の名を十回も繰り返した。「レセップス」の名を運河国有化の「ゴー」を意味する暗号にきめていたのが、部下が聞き逃すのが心配で、十回も口にしたのだ。

( 天声人語、1975-6-3)

上の(3)における「を」や(4)における「に」は、基本的には、格助詞だと考えることができても、(5)における「を」や(6)における「が」は、もはや格助詞という概念では取り扱いきれないだろう(注1)。例えば、(6)では、主節の述語「口にした」の意味上の補語は「レセップス」の名を」であり、けっして「～暗号にきめていたのが」ではないと考えられる。つまり、ここで、「(の)が」は、もはや「純粋な」格助詞ではなく、格助詞としての意味・機能が稀薄になり、機能語としての性格が強い「の」と結合して「のが」といった「準接統助詞」を形成しつつあると思われる。なお、(3)(4)の諸例でも、(5)(6)と同様に、主節の述語に対する構文上の補語と、意味上の補語とは異なる。すなわち、(3)では「読んだ」の対象は下線部の引用節であり、(4)では「出遇った」の対象は「髪

の長い小肥りの男」は、「パイプをくわえて正面から来る髪

の長い小肥りの男」という連体修飾構造の中の被修飾部が元の構造、佐久間昇流に言えば、「述定」の構造における位置に回されたものであると考え、このような性格の連体節を「状況の連体節」と呼び、その特徴の考察を通じて、「の+格助詞」の接統助詞化の過程を観察してみたいと思う。

## 1. 考察の視点

先ず、状況の連体節の構文を、次のような構文から区別する必要がある。

(7) 冬で、畳の上のストーブの前に白樺の切ったのを積み上げて、二、三本ずつ入れる。

( 松本清張『水の肌』p.19)

(8) 東京銀座の教寄屋橋をはさんで一方は田中首相、一方は成田社会党委員長が町の人に呼びかけるのを聞いた。

( 天声人語、1972-11-21)

(7) において、被修飾部(以下、「底部」と呼ぶことにする)が、「白樺の」という形で、前ぶれ的に表現され、「切った」という連体節から(部分集合の)限定的修飾を受けるのに対して、(3)～(6)では、底部が連体節から、何等の限定修飾も受けていないのである(Kuroda, 1975-6, p.95 を参照)。

また、(8) では、主節の述語「聞いた」に対して、下線部の従節が、単なる構文上ではなく、意味上も、一つの補語という役目を果たす。この構文で「を」のような助詞は「の」に密着するのではなく、場合によって「こと」とも結合する、言わば、純然たる格助詞である。

もっとも、「の」と「こと」の間に使いわけがあることはよく知られている(0.で挙げた文献を参照)。例えば、工藤真由美(1985)はこの問題をつぎのように論及している。動詞は、基本的に、①「の」をとるもの、②「こと」をとるもの、③「の」「こと」の両方をとるもの、と大きく三分類できる。

①、「の」をとるものには、「見る、聞く」のような感覚動詞のグループ、と「待つ、手伝う」のような動作性動詞のグループがある。

②、「こと」をとるものには、「思う、理解する」のような思考動詞のグループ、「言う、書く、読む」のような伝達動詞のグループ、それに、「命じる、約束する」のような意志動詞のグループと、「示す、指摘する」のような表示動詞のグループがある。

③、「の」「こと」の両方をとるものには、「知る、気付く」のような認知動詞のグループと、「喜ぶ、悲しむ」のような態度動詞のグループがある。

ただし、伝達動詞の一つである「読む」は、次の(9)に見られるように、「従属節の動詞が<書いている>の場合は、「の」をとる。」という注が付けられている。

(9) また雑文欄に春山行夫が『峰の小舎の生活』という随筆を書いているのを読んだ。

本稿で、(9)において「こと」が使えないのは、この文が「状況の連体節」の構文に属するからだと考え。つまり、ここでは「～随筆」が「読んだ」の意味上の補語だと解される。

## 2. 「状況の連体節」の位置付け

上のような視点から、「状況の連体節」の構文と関連のある構文を次のように位置付けることができよう。

- @ 「状況の連体節」の構文は、話し手が「点的な個体」を「面的な事象」として認知・伝達したものであると考えられる。
- @ 因に、(10)のような、いわゆる「非限定」の連体修飾構文は、話し手が「面的な事象」を「点的な個体」として認知・伝達したものであると考えられる。
- @ また、(8)のような、いわば「補語としての名詞化構文」は、話し手が「面的な事象」をそれなりに認知・伝達したものであると考えられる。
- @ そして、「限定の連体修飾」は、話し手が「点的な個体」をそれなりに認知・伝達したものであると考えられる。

(10) 世界の大勢から目かくしされた国民は、やがて無謀な戦争にひきずりこまれる。

(天声人語、1976、春、p.183)

### 3. 「状況の連体節」の意味的な特徴

「状況の連体節」は、底部が主節に展開される際、その具体的背景や場面・状況を表わすものである。いわば、底部を構文的に位置付けるのである。そのせいか、指示表現「その」は底部の前に表われにくい。例えば、

- \* (11) 彼女がその『いのち』という本を書いているのを読んだ。(注2)
- (12) 彼女が書いているその『いのち』という本を読んだ。

(12)では、「その」は、いわば語彙的に「『いのち』という本」を位置付ける働きを持つと考えられるが、(11)では、この語彙的な位置付けに、状況の連体節による、言わば、構文的な位置付けが重なって、不適格な文を生じているだろうと思われる。

### 4. 「状況の連体節」の分類

この種の連体節を、底部との関係、つまり、底部の状況をどのように表わすかによって、「内在状況の連体節」と「対照状況の連体節」と、大きく二分類できる。そして、前者を、さらに「内容表出の連体節」と「現場状況の連体節」と分けておこう。

#### 4.1 内容表出の連体節

この場合、底部は、一つの引用節である。連体節の述語動詞は、或る「表出性」の動作を表わし、この動作の結果として底部の表わす内容が生まれる。換言すれば、連体節の述語動詞と底部との間に「表出=内容」という一種の表裏関係があるのである。ここで、或る内容が、或る人によって、或る具体的な表現形式で、或る媒介物を通して、表出される。従って、連体節の述語動詞は「結果残存」の性質を示すのが普通である。そして、主節の述語は、この結果・内容に対する、文の主語の受容のあり方や受け止め方を表わすものである。「内容表出の連体節」の例として(3)の他に(13)(14)も参照されたい。

- (13) 外国人には分かりにくい所があるとしても、春日野理事長が「すべて、あるがままの本物の姿を見てもらいたい」と語っているのに賛成だ。  
( 天声人語、1985-6-12)
- (14) 同じ白書に「たとえば仙台、秋田、松山の各市では近ごろ大都市圏からの転入者が急速に増えている」とあるのが面白かった。  
( 同上、1972-7-18)

上の二例では、「賛成だ」と「面白かった」の対象になるのは、それぞれ、下線部の引用節の表わす内容であると解される。なお、次の(15)も見てみよう。

- (15) こうした食い違いは、今年一月の中曽根首相訪韓の際にも表れ、韓国側が「日米韓三角安保協力に合意」と伝えたのを日本政府は最後まで否定し続けた。  
( 朝日、1983-11-13、朝)

ここで、否定され続けたのは「日米韓三角安保協力に合意(が成立した)」という内容であるが、もし「の」の代りに、「こと」を使えば、否定され続けたのは「韓国側が、... 伝えた」という事態全体であると解釈できる。

#### 4.1.1 品詞転化の「という」

内容表出の連体節に対応する装定の形は次のような構文として表れるものと思われる。(3)と(13)を、それぞれ、(16)と(17)と比べてみよう。ここでいう装定とは「名詞句を形作るような語句の配列(junction)」のことであり、そうでない方の配列を「述定」(nexus)という。(三上章『日本語の構文』p.103を参照)

- (16) 雪は消えるが富士山頂の土は夏も凍っている、という語を本紙文化欄で読んだ。  
( 天声人語、1972-9-11)
- (17) 「政治責任が有効に機能しない場合には権力を乱用しがちだ」( 杉原

泰雄) という説に筆者も賛成だ。

(同上、1982-6-15)

(3)(13) では、引用節の「作者」が具体的に、表わされているのに対して、(16)(17)では、それが普通は抽象化する。この抽象化は「語っている」のような動詞に一般性をもたらし、発話・思考性の名詞、「話」「説」等へ、言わば、転化させるという役割を果たす。この品詞上の転化は、修飾関係上の転換を生じ、その名残として「という」を残すと思われる。「という」が、発話・思考性の名詞に必要なゆえんである。因に、井上(1976:235)は、(16)のような「同格名詞句」の内容節の一特性として、同格名詞句では、その内容節だけの事実性を否定する文が成立することを挙げて、下の(18)は下線で示した内容節が事実ではないと述べているので、報告したことが事実ではないと言っているわけではないと指摘している。この指摘を念頭において、(15)の例を再度見られたい。

(18) 日本選手が参加しなかったとの報告はまちがっていた。

#### 4.1.2. 形式化の「という」

上のような装定の形としての抽象化だけではなく、述定の形としての抽象化もある。例えば、

(19) 現在の制度は医師と患者を卑しくしている、というのが持論だった。

(天声人語、1979、夏、p.105)

この場合、内容表出の連体節の動詞は「(と)いう」まで極度に形式化するが、この形式化の「という」は、上述の、品詞転化の「という」と、微妙に違うように思える。前者は形式化されてはいるが、連体節の述語という機能を失っていないのに対して、後者は、この機能を持たず、単に引用節と名詞をつなぐ役目を果たす要素に変ったのである。この事は、後者が「との」や「といった」と置き換えてできるが、前者は出来ないという現象にも現れる。

#### 4.2. 現場状況の連体節

この種類の連体節は、Kuroda, S.-Y(1975-6) では、Pivot-Independent Relative Clauseとして 研究されている。同論文で、その成立の条件として両節の間に、

- (a) 同時性 (Simultaneity)
- (b) 同一場所生起 (Co-positional)
- (c) 密接な語用論的關係 (Pragmatic Direct Relationship)

といった解釈が必要であるという Relevancy Condition が提案されている。具体的には、次のような例が挙げられている。

- (20) 太郎は花子が( \* 昨日) リンゴを皿の上に置いたのを取って...
- (21) 太郎は花子が昨日リンゴを皿の上に置いておいたのを取って...
- (22) 太郎は花子が襲いかかってきた/\* 遙々訪ねてきたのをねじ伏せた。

現場状況の連体節の場合、例えば、(22)で意味上、「ねじ伏せた」の対格補語は「花子(が)」であり、「花子が襲いかかってきたのを」ではないにもかかわらず、「同時性」や「同一場所生起」といった解釈が要求される点で、(8)のような、感覚動詞の構文に類似している性格を示すと思われる(注3)。これが、これから考察する対照状況の連体節と根本的に違うところである。

#### 4.3. 対照状況の連体節

この種類の連体節の特徴として、主節と結合して底部の状態の変遷や中止を表わすことが挙げられよう。例は、(5)(6)のほかに、次の(23)も見てみよう。

- (23) 娘は夏休みが終るまで居る予定だったのが、急に明日東京に行くことになった。

\* (24) 娘は、先月から家に居たのが、明日から居なくなる。



#### 4.3.1 対照状況の連体節につく「の」の構文上の性格

現場状況の連体節と内容表出の連体節につく「の」は、「が」「を」の外に、「に」「へ」も取ることができるが、対照状況の連体節につく「の」は、「が」「を」しか取ることができないようだ。(4)と(13)は「に」が使われる例で、下の(25)は「へ」が使われる例である。

(25) おきしは間の子船が帰るのへ乗って...

(Martin, Samuel E.(1975)より借用)

この構文的な性格は、内在状況の連体節と、主節との間に、一種の「統合性」や「連結性」があるのと違って、対照状況の連体節と主節との間に、一種の「変移性」や「中止性」がある、という意味上の特徴と、密接な関係があるらしい。ここで、「が」と「を」の、渡辺実流に言えば、「強展叙性」も注目に値しよう。

#### 4.3.2 「が」「を」の接続助詞化

対照状況の連体節につく「が」と「を」は、もはや、格助詞ではなくなりつつある。同時に、この現象に呼応して、底部も、連体節から離れて文の主題化をするか、前文脈にしか現れなくなるか、または、完全に「無形化」するか、といった傾向が強い。

(26) 合計特殊出生率は、昭和25年には3.65% だったのが、40年2.14、50年1.91と下がり続け、56年はどん底の1.74に。

(朝日、1985-9-22,朝、p.3)

(27) ハレー彗星がひと回りしてくる間に、世の中はずいぶん変わった。なかでも宇宙科学の進展はめざましい。前回の接近時には地上から望遠鏡をのぞくほかなかったのが、こんどは直接、無人探査機をとばして観測しようという計画が進んでいる。

(天声人語、1981-12-29)

- (28) 今までの気象学は『あらしの気象学』だったが、ほかに近年は『静穏の気象学』が必要になってきた、という話がある。今までは暴風雨を警戒していればよかったのが、近年、静穏な日にも災害がおこる。

(同上、1972-11-13)

上の諸例における底部は、(26)では連体節から離れて文の主題化をし、(27)では、前文脈にしか現れなく、そして(28)では、完全に「無形化」していると考えられる。この三例で、「のが」は純然たる接続助詞の性質を備えるようになったと思われる。つまり、「の」によって名詞化して格助詞を従えた対照状況の連体節は、接続節化する過程の終りにあるのである。「状況の連体節の構文」は、ここで、複文構造に最接近すると言えよう。逆に、内容表出の連体節は、主節の述語が名詞である場合、後続する「のが」、次のように、未だに主題化できるので、「の」によって名詞化して格助詞を従えた「状況の連体節」の接続節化の過程の始まりにあると言えよう。

- (29) 学校では非行や暴力騒ぎはまったくなかった。「信じられない」と学校の関係者がいっているのは、正直な気持なのだろう。

(同上、1979、夏4、p.79)

#### 4.3.3. 「が」を取る対照状況の連体節と、「を」を取る対照状況の連体節との相違

「の」によって名詞化した対照状況の連体節は、「が」を取るのも「を」を取るのも、文全体の表現から見れば、一種の「付帯状況成分」のような機能を持つと考えられるが、二つの場合の間に、述語動詞のアスペクトに関して、相違が見られる。「のが」の前には已然相の述語のみが現れ得るのに対して、「のを」の前には已然相の述語も、未然相の述語も現れ得る。「が」を取る対照状況の連体節は、「元来」と目される時点における物事の状態を表わし、その時点からみての、物事の変化ぶりを浮き彫りにする役割を果たす。

- (30) 本来ならその晩も、一泊の予定で豊橋へ出張するはずだったのが、急に予定が変更されて早く帰宅したのである。

そして、連体節の述語が、名詞に「だ」が付いたものである場合、「外角のはずが真ん中へ」のような表現が生じてくると思われる。(寺村(1982:199)を参照)。

一方、「を」を取る対照状況の連体節は、已然相の場合、物事のそれまでの状態が中止され、反対の状態が始められることをあらわし、または、未然相の場合、或る事柄が実現の寸前に阻止されることを表わす。換言すれば、未然相の場合、主節の述語動詞は、「否定含意述語(negative implicative predicate)」の一種である。なぜかという、主節が肯定の時に連体節が偽であり、主節が否定の時に連体節が真であることを前提とするものだと考えられるからである。(井上(1976:253)を参照)。

- (31) 二がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、  
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」  
(同上)

#### 4.4. 接続助詞化要素「を」を取る他の表現

上のような「を」の意味的な特徴は「ところを」等の表現の中でも見られる。例えば、

- (32) 寿司を食べながらウイスキーを飲んでいたところを、襲われたのであった。  
(同上)
- (33) 二月一日、仙台市内で路上駐車中を盗まれたものである。  
(松本清張『水の肌』)
- (34) 内務・公安相ミシェル・アイクベ大尉は、二十日夜、クルク大統領夫人との密会現場を見つかり、射殺された。  
(天声人語、1975-6-23)

また、次の「それが」と「そこを」の中の「が」と「を」も、基本的には、それぞれ

れ、上述の「元来性」と「阻止性」といった意味特性を持つと考えられる。(寺村(1978:18)を参照)。

- (35) 本紙家庭欄によると、20年前、日本人のほぼ半数は夜10時には床についたという。それが最近は10時に寝る人は4人に1人になった。

(天声人語、1980-1-8)

- (36) 「...、あなたのために米軍に依頼はできませんよ」

(中略)

「そこをなんとかか...」

(『ちょっと殺人を』)

## 5. 「状況の連体節」に付く「の」の名詞性

「こと」に置き換え得る「補語としての名詞化構文」における「の」と、「内在状況の連体節(内容表出の連体節と、現場状況の連体節)につく「の」と、「対照状況の連体節」につく「の」を、それぞれ、「の1」、「の2」、「の3」とすれば、「の」の名詞性は、「の1」>「の2」>「の3」という順で減少すると言えよう。そして、通常、接続助詞とされる「のに」や「ので」における「の」は、こう見れば、名詞性の極度に減った「の4」に当ると言えよう。

## 6. 「状況の連体節の構文」に対応するベトナム語での表現

ベトナム語では、英語と同様に、日本語の現場状況の連体節を限定修飾節で表現するしかないが、興味深いことに、対照状況の連体節の構文を訳する際、比較や対照の意味を表すのを本務とする“thì”と、相反の意味を表す“lại”を用いる。例えば、(5)を訳してみれば、次のようになる。Ở đây, ta đang tự vấn, có phải lỗi đi bộ của mình nhanh quá không, thì nghe nói, bên ấy, họ lại bắt chước chúng ta, muốn đi nhanh hơn. なお、内容表出の連体節を訳する場合は、(16)のような対応する構文で賅うのである。従って、例えば、(15)における「韓国側が... 日本政府は最後

まで否定し続けた」を訳してみると、Chính phủ Nhật bác bỏ đến cùng・lời[言葉] loan báo[報道] của phía Hàn quốc・cho rằng [という] đã có một sự thỏa thuận về việc hợp tác phòng thủ ba bên Nhật Mỹ Hàn ということになるだろう。もし「... 伝えたことを...」を使えば、その訳は Chính phủ Nhật bác bỏ đến cùng・việc [事実]・phía Hàn quốc loan báo[韓国側が伝えた]・rằng [と] đã có một sự thỏa thuận.... ということふうになるだろう。

## 7. まとめ

以上をまとめると、次のようになる。

「の」で名詞化して格助詞を従えた「状況の連体節」は、次の順で、接続節化すると考えられる。

内容表出の連体節⇒現場状況の連体節⇒対照状況の連体節

## 【注】

- 1) (4) のような構文を研究するものに、Kuroda(1975-6)がある。
- 2) 例文の頭に付した \* はその文が非文法的であることを示す。
- 3) 坪本篤朗(1984)参照

## 【参考文献】

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語・上』大修館書店  
北原保雄(1984)『日本語文法の焦点』教育出版

- 工藤真由美(1985)「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』3
- Kuroda, S-Y(1975-6) Pivot-Independent Relativization in Japanese(II) Papers in Japanese Linguistics 4
- 黒田成幸(1976)「日本語の論理・思考」『岩波講座 日本語1 日本語と国語学』  
岩波書店
- 草薙裕(1981)「従属節および関係節におけるテンス・アスペクトについて」『馬淵  
和夫博士退館記念国語学論集』大修館
- Martin Samuel E.(1975) A Reference Grammar of Japanese Yale Univ. Press
- 佐久間鼎(1967)『日本の表現の言語科学』恒星社厚生閣
- 坪本篤朗(1984)「文の中に文を埋めるときコトとノはどこが違うか」『国文学』5  
月刊
- 寺村秀夫(1978)「『トコロ』の意味と機能」『語文』34, 大阪大学国文学研究室  
\_\_\_\_\_ (1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所  
\_\_\_\_\_ (1982)『日本語のシンタクスと意味、I』くろしお出版
- 渡辺実(1971)『国語構文論』

#### 付記

本稿は、1985年 9月27日に、第 151回 MBK (三上章文法研究会) で、行なった発表  
を大幅に加筆修正したものである。数々の助言を下された方々に心から感謝致します。

Where Relative Clauses, Nominal Clauses and Adverbial Clauses Meet

\_\_\_A Case Study from Japanese\_\_\_

Le Van Cu

In Japanese the relative constructions play an important role in the formation of complex sentences. In ordinary relative constructions, the relative clauses precede the base, but in relative constructions to which we refer as "Adverbial Nominalizing Constructions", and in which the relative clauses follow the base (or, perhaps more accurately, are restored to the Nexus form) and are nominalized by NO, the relative clauses have a tendency to approach, in some measure, adverbial clauses.

The present research extends observations on the adverbiality of these R.C., which include three types: "Contents-Expressing R.C.", "Immediate Circumstantial R.C." and "Contrastive Circumstantial R.C."

The first type contains as the base, not a noun phrase but a quotation, the second type is what Kuroda, S-Y. (1975-6) calls "Pivot-Independent Relative Clause", and the third type expresses a meaning which is quite opposite to that of the main clause.

Through the analysis of examples collected from newspapers, essays and novels, it is verified that there is a hierarchy of adverbiality something like the following, in the domain of R.C. nominalized by NO and followed by a case-marking.

Contents-Expressing R.C.

Immediate Circumstantial R.C.

Contrastive Circumstantial R.C.

↓  
Adverbiality